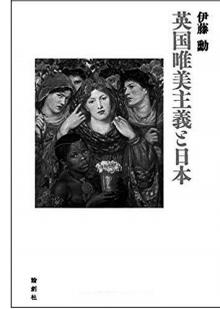


## 書 評

伊藤勳著『英国唯美主義と日本』  
(論創社、2017)



沓掛 良彦

詩人であり英文学者・ペイター研究家として世に知られる伊藤勳氏が昨年上梓された本書を評するにあたって、まずお断わりしておかねばならぬことがある。それは著者会心の作であると思われるこのようなすぐれた書物に、なにがしかの評言を加えるだけの資格、知見が私には欠けているということである。由来私は英語圏の文学への関心が薄く、その方面に関する知識も見識も著しく乏しい。しかしせっかく与えられた機会でもあるので、この場をお借りして、英文学に暗い一門外漢としての読後感を述べさせていただくこととした。併せて日本におけるヨーロッパ文学研究のあり方についても、積年の疑念の一端を洩らすことをお許しいただければ幸いである。

一体にわが国のヨーロッパ文学研究者は、視野が狭く、射程距離が短く、そもそも自分がヨーロッパの文学を研究しているのだという意識が希薄であるように思われる。これは英文学研究者にも顕著に認められる現象と見受けられる。わが国では少なからぬヨーロッパ文学の研究者が、自分はいずれの特定の国の、ある時代のある詩人なり作家なり演劇を研究しているのであって、別段「ヨーロッパ」文学というようなものを研究しているわけではない、というふうに考えているふしがある。それに加えて、近・現代文学偏重で、多くの研究者はディアクロニックな視点を欠いており、ヨーロッパ文学に底流にあるギリシア・ラテン文学への関心が薄かったり、無関心であったりすることも稀ではない。(全体として中世への関心も乏しい。)これは、なによりも十九世紀におけるナショナリズムの産物としての各国文学が成立した時期と、わが国へのヨーロッパ文学の移植、紹介が

始まった時点とが重なった結果であり、そこから生じた通弊であると私には思われる。各国文学の研究者は、その狭隘な枠に閉じこもり、それに満足して自足してはいまいか。

その結果、わが国の各国文学の専門家によって書かれている膨大な数の研究書で、専門外の研究者をも惹きつけたり、一般の読者を魅了するような書物に出会うことはまず稀である。

伊藤氏のこの著書は、そのような稀な例である。それは一個の *poeta doctus* が生んだ「文学の書」として読むに堪え、また読者の心を動かし潤すだけの力を秘めている。なによりもまず詩人であり、かつ英文学者・ヨーロッパ文学者として広く豊かな学殖あつての快著だと言ってよい。この本を読むこと自体が、一種の芸術的快楽を与える珍しい研究だと言える。

伊藤氏のこの著書は、そのタイトル『英国唯美主義と日本』が示しているとおり、スウィンバーン、ペイター、D・G・ロセッティらによって推し進められワイルドにまで受け継がれたイギリスの芸術思潮のひとつである唯美主義の生成発展に、日本趣味(ジャポニスム)がどのように作用したかを、究明した本である。この書は全六章から成り、以下のような配列となっている。

第一章「英国唯美主義と日本の影」

第二章「英国唯美主義の濫觴」

第三章「ギリシア・エピクーロス的世界と日本——英国唯美主義の素地」

第四章「日本の詩人達とワイルド受容」

第五章「ワイルドと西脇順三郎——肉声の恢復者達」

第六章「ラフカディオ・ハーン——ロセッティ、ペイターとの類縁」

このうち本書全体の三分の二を占めている第一章から第三章までがイギリス唯美主義そのものの考察、探求に充てられており、後半の三章は比較文学的視点に立った詩人研究である。

伊藤氏はまず「英国唯美主義と日本の影」で、ペイターの唯美主義批評が、イギリスで最初に「芸術のための芸術」という言葉を使ったとされる詩人スウィンバーンに与えた影響から説き起こし、スウィンバーンの美学を「ペ

イターの本歌取り」と定義している。そこからさらに「芸術のための芸術」(l'art pour l'art)という観念の由来を、フランスのゴッティエにまで視野を及ぼして説き、進んでやはりスウィンバーンに深く影響を与えたD・G・ロセッティとの関係に筆を及ぼし、上記の観念に基づいた芸術的姿勢で批評を展開したペイターの批評に触れて、その根底にありペイターが拠り所としていたのがギリシア思想、ギリシア人自然観であったことを明らかにしている。また当時のイギリスで指摘されペイター自身も意識していたギリシア人と日本人の精神的類似性の問題にも触れ、英国唯美主義に、当時新たに発見された日本芸術の美意識、美の観念の影が射していることに言及している。ペイターの芸術理念を支えたこの中の一節「プラトーンと芸術のための芸術」は、氏のギリシア思想への関心の深さと造詣の深さを示すものだが、ペイターのギリシア芸術観は、今日の古典学徒の眼から見ると、かなり特殊なものに映ることも事実である。

この章で最も生彩に富み、詩人ならではのこまやかな感性と犀利な芸術批評眼がはたらいいて、本書を読むよるこびを強く感じさせるのは、ラファエル前派を代表するロセッティ、それにホイッスラーの文学的絵画をあつかった後半部であるように思われる。ここではロセッティの代表作『ベアータ・ベアトリックス』をはじめとするこの詩人にして画家の絵画が、繊細な美的感覚で分析され、描き出されており、ロセッティの絵画に浮世絵などの日本的意匠が、それらの絵画にどのように作用したかが説かれている。ラファエル前派の絵画に関する伊藤氏の理解の深さ、鑑賞眼の鋭さが窺われ、さすがと思わせる。ホイッスラーの絵画を論じたくだりについても、同様なことが言える。「色彩調和の音楽性」を論じた一節でも、詩人ならではの感性が遺憾なく発揮されているのが見られる。

第二章「英国唯美主義の濫觴」は、イギリスにおける漆器と磁器に始まる日本の美術工芸品、装飾美術への異様なまでの関心の高まり、それに伴うロセッティやホイッスラーにおける日本趣味、日本芸術への強い傾斜とその影響がたどられ、「ロセッティからワイルドに至る英国唯美主義文学が、かくして日本趣味と不即不離の形で発展して」いることが丹念に立証されていて説得力に富む。「一八七〇年代には、『日本趣味と唯美主義とは事実上同意義』となるほどに、英国の藝術と美的生活に日本が深く関わってゆ

く」という指摘などは、その方面に暗い私などには驚きだが、これはわが国の大方の読者にとっても同様であろう。蒙を開かれた思いである。ちなみにここでも「ギリシアと日本」という一節が置かれ、『大君の都』の著者オールコックが指摘する古代ギリシア人と日本人の類似性や、ペイターが「ギリシア彫刻の起こり」で説いたという、「澄明で優美で簡素な手法と表現、理智によって統御された意匠、自然と同様な繊細さを具えながら、合目的性と美とが一致した生活藝術という点で、ギリシアと日本との共通性を見ようとする」芸術観が紹介されているが、ペイターのこのような芸術観は一面真実だが、かなり偏頗なところもあることは事実かと思われる。日本人とギリシア人に似たところがあるとすれば、共に恥（アイドース）の文化で、共に多神教で祭式のみあって教義・経典をもたなかった神観念や宗教の面においてであろう。その点では、ニーチェの言う「キリスト教に汚染される以前のヨーロッパ」つまりはギリシア人と日本人には、確かに似通ったところがある。

第三章「ギリシア・エピクーロスの世界と日本」は、「英国唯美主義の素地」というサブタイトルにあるように、英国唯美主義の基盤の一つとなったエピクーロスの哲学と東洋思想、日本との関わりを論じたものである。英国唯美主義を推進したペイターが、その美学思想を形成する上で、インド思想の影響を受けたとされるエピクーロスの哲学に多く依拠し、さらにはデモクリトスの思想をも踏まえていたことが、十分な説得力をもって説かれていて興味深い。

ここでも伊藤氏はギリシア哲学・思想に関する並々ならぬ造詣の深さを見せている。そればかりか氏の筆は仏教思想・仏教哲学にまで及んでおり、その知見の広さには驚かされずにはいられない。パルメニデースからデモクリトス、そして「アタラクシア」(心の平安)を説いた「庭園の哲学者」エピクーロスに及ぶ流れが簡潔に叙述されていて、その方面に疎い私をも納得させる。「エピクーロスの神観と仏教」という、両者の類似性、親近性を説いた一節などは、東洋人の学者でなければ到底書けないものである。私はギリシア哲学には暗いが、「エピクーロス哲学は仏教思想の滲透した日本の精神風土とは通い合うものを持っている」という著者の主張には、一門外漢ながら共感を覚える。

この章を締めくくる「英国唯美主義は日本の絵画など視覚藝術による外面的影響のみが取り沙汰されることが多いが、ギリシア哲学への回帰により、殊にエピクテロス哲学を通して思想的にも仏教思想に最も近づいたことで、極めて日本的な傾向を見せたのである」という結論は、日本人英文学者が出し得たまさに創見と言うべきものではあるまいか。

さて本書の主要部分をなす第一章から三章までにはほとんど言を費やしてしまい、一種付論のような形で収められている「日本の詩人達とワイルド受容」、「ワイルドと西脇順三郎」、「ラフカディオ・ハーン」に触れる余地がなくなってしまった。ほんの一言ずつ評すれば、いずれの章も、詩人、詩の実作者ならでの詩的感性と、英文学に関する伊藤氏の学殖が見事に溶け合った快い詩人論となっている。とりわけ氏の私淑する詩人西脇とペイター、ワイルドとの関係を論じた章は、氏と同じく西脇の詩を愛する私には興味深く思われた。「順三郎はポウザーとしてはワイルドを毛嫌いしたもの、どことなくワイルド的なところを持ち合わせており、先のようにワイルド型ペイタリアンと呼んでもいいが、その根本的な繋がり、順三郎が肉声の回復という点でワイルドを引き継いでいるところにある」という結語は、ペイターを知悉し、西脇詩をよく知る詩人の見解と言うべきだろう。

——東京外国語大学名誉教授